第２回北大阪健康医療都市産学官民連携プラットフォーム構築支援業務
委託事業者選定会議　部会　議事要旨

１　日時

令和２年 10 月 21 日（水）14 時 00 分～16 時 30 分

２　場所

吹田市保健所　講堂

３　出席者

吉村部会長、平井委員、大庭委員、山田委員、吉武委員

４　案件

（１）提案内容の評価について

（２）その他

５　議事概要【注：委託候補者に選定された三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング・新産業文化創出研究所共同企業体は本議事概要のＢ社です。】

（１）配付資料に基づき、事務局から進行方法等について説明した。

（２）Ａ社の提案内容に関するプレゼンテーション及び質疑応答を行った。質疑応答のやりとりは以下のとおり。

【委員】

健都だからこそ留意したポイントは。

【事業者】

産学官民すべてが揃っている点が大きな特徴。国循、健栄研のシーズの活用、研究機関と市民とをつなげることが課題だと考えている。

【委員】

クラスター形成と言いつつ、中での連携がうまくいかないケースがあるが、健都の事業でどのように回避するのか。

【事業者】

当社は内閣府のスタートアップ・エコシステムの事務局を担当しており、大阪全体のイノベーションの創出の舵取りを担っている。そのなかで健都においてできることの具体化し、その特徴の先鋭化が可能と考える。

【委員】

市民のニーズと企業のニーズをどのようにマッチングするのか。企業ニーズはなかなか市民ニーズに合ってこないと思うが、いかに合わせるのか。健都で

の新しい価値をどのように作っていくのか。
【事業者】
　市民を巻き込んだ取り組みについては、健都レールサイド公園・健都ライブラリーの指定管理者との連携が大事だと考える。
【委員】
　提案のあったシステムは大阪府に帰属していると認識しているが、これを活用していくという理解でよいか。
【事業者】
　そのとおり。
【委員】
　市民をどう参画させるかが重要だと思うが、御社ならではのアイデアはあるのか。
【事業者】
　当社はコンサルティングファームなので産学連携のところは強いがボトムアップは弱い。そこはリビングラボの運営実績のある NPO と連携しながら、市民を巻き込んでいきたい。
【委員】
　健都における会議体があり横の連携を図っているが、今の会議体にどのようなイメージを持っており、どのように展開するのか。
【事業者】
　どこまでマネジメントするか、あるいはオブザーバー的な位置づけとするのかは協議して進めたい。横串を通すことは必要と思うが、そのあたりは相談していきたい。
【委員】
　民間資金獲得に向けて一番のネックはなにか。
【事業者】
　ポイントは、いかに受益者からお金をもらうかに尽きると考える。民間企業が魅力的と思える仕組みが必要。
【委員】
　会議体にエリマネ組織の図があったが、提案のあったシステムとエリマネ組織との関係性は。
【事業者】
　提案したシステムそのものはスキームのひとつであり、エコシステムを駆動させるパーツ。組織については、ピラミッド型が正解かはわからないが、一定横串を刺す組織は必要。形については協議して決めていきたい。
【委員】
　健都の特長を踏まえ、プラットフォームにおいて行政の果たす役割は。

【事業者】
一般的には、行政は色に染まっておらず、プラットフォームに民間メンバーが入りやすくすること。当社としては更に、プラットフォームの運営のチェックと、国との調整等の役割を担ってほしいと考える。

（３）Ｂ社の提案内容に関するプレゼンテーション及び質疑応答を行った。質疑応答のやりとりは以下のとおり。

【委員】
防災について提案理由は。また、健都外の企業へのニーズ調査はどのように行うのか。

【事業者】
防災については募集要項に記載があり、市民にとっても身近で参加しやすいため提案した。また、非常食や水の確保については発展途上国支援の観点で、食品企業を巻き込む等の展開可能。企業が健都周辺のためだけに予算を割くことはないため、横展開する際の示唆としたい。すでに食品会社ともトライアル的に話をしている。また、別のヘルスケア関係のプラットフォーム運営をしており、ヘルスケア業界とのつながりがあるので活用していく。

【委員】
オープンイノベーションについてはうまくいかないケースもあるが、御社がこれからしようとしていることは他と何が違うのか。健都ならではのポイントは。

【事業者】
オープンイノベーションの解釈はかなり広い。地域課題を市場と考え、ビジネスチャンスととらえる企業を誘導したい。

【委員】
リビングラボの話があったが、市民としてはデータだけ取られるだけでメリットがないのでは、という不安がある。市民に対してきちんとした説明が必要だと考えるが、気を付けるべき点は。

【事業者】
健都はできて間もなく新旧コミュニティの融和ができていないと思われる。企業側が何を考えて、何をしようとしているのかを発信し、理解してもらう。また、市民側のキーマンを発掘し、育て、組織化していくことが重要。

【委員】
対話型コミュニケーションとはなにか。

【事業者】
企業側が普及啓発のように一方的に上から目線になりがちだが、市民が自分

たちのニーズを発信することで研究者のベクトルが変わることもあり、それを対話と呼んでいる。地域課題に応じた研究者を引っ張てくる、ということを考える。

また、今回社会実験を行うことも考えている。市民は、社会的な意義があるからといって参加するとは限らない。楽しいイベントや、自らのベネフィットにならなければ参加しない。例えば三ツ星レストランのシェフの監修した援助物資が食べられること等を考えている。

【委員】

ソーシャルコミュニケーションがポイントかと理解したが、うまくいく仕掛けはあるのか。

【事業者】

研究者が一般の人に説明することが難しい。当社では、研究者が子どもにも分かる言葉で説明し、理解されているか自身がジャッジメントされる「こども大学」という取組みをしている。教えているつもりでも子どもが分かっていないと、やり方を改善しないといけなくなる。異業種では専門用語が違う中で、この取組みを通し、業界を超えた共通言語ができ、イノベーションが推進されている。

【委員】

健都の特長を踏まえ、プラットフォームにおいて行政の果たす役割は。

【事業者】

共創メンバーのひとつであり、単なる事務局とは思っていない。行政が上という位置づけにすると、市民からの要求の対象となってしまうケースもあるため、同じ立ち位置ということを示すことが大事。また、広報や実証実験の際の関係機関との協議の際にも支援をいただけると助かる。

（４） Ｃ社の提案内容に関するプレゼンテーション及び質疑応答を行った。質疑応答のやりとりは以下のとおり。

【委員】

市民のニーズ把握はどのように行うのか。

【事業者】

健都やその周辺で活動されている市民団体とも連携しているので、そういったチャンネルも活かしていく。

【委員】

市民のワークショップを行うとのことだが、意識のそれほど高くない層をどのように集めるのか。

【事業者】

健康医療のイベントとなると意識が高い方が集まる傾向があるが、連携している大学の研究者によると、健都は関係者でクローズしている印象があるとのことで、その研究者のノウハウを活かしていきたい。他市事例においては、広く市民を集めることができた。コミュニケーションデザインを周到にしていきたい。

【委員】

市民との共働を重視するとのことだったが、市民イベントに健都のプレーヤーがどう入っていくのか。

【事業者】

産学連携の取組みと市民向けの取組みとの関係性のことだと思うが、それぞれ独立したものではなく、パラレルに走りながら実施するものと認識している。マッチングは当社が担っていくイメージ。また、国循、市民、ビジネスセクターそれぞれの役割があると思うが、研究機関のニーズ、市民のニーズ、ビジネスセクターのニーズを結び付けていけば続きやすいと考える。

【委員】

実績で「深く長く関与」という表現があったが、そのようにできる条件は何と考えるか。また、御社にとってそのようにするメリットは。

【事業者】

当社は地域が持続していくということをミッションにしている。当然、資金調達や制度は必要だが、参加する者がみんな楽しく、やる気を出せるような仕組みが一番必要。誰かが多く負担するというのでは続かなく、負担を分散させることが必要と考える。

【委員】

資金面は重要。資金を生み出す産学連携の部分の期待は大きいと思うが、産学連携のメリットはなにか。

【事業者】

一例として提案書に記載した大学は環境省の資金を使っているが、本来の役割に競争資金を使うのはオーソドックスな方法。他には参加者から広く参加者から集める方法もある。事例で示している現在行っている実証実験では民間スポンサーを使うことをトライしている。固定的に稼げる仕組みを模索してくことを考えているが、いろいろトライアルしていき、いかにお金を出せるようなプラットフォームにするのかのノウハウはあると思う。

【委員】

健都の特長を踏まえ、プラットフォームにおいて行政の果たす役割は。

【事業者】

広報や発信をしっかりすることが大事であり、トップセールスを含め、バックアップをお願いしたい。民間ではなかなか難しいので旗を振ってほしい。ま

た、フィールドの提供は公的セクターでないと難しいのでお願いしたい。

（５）Ｄ社の提案内容に関するプレゼンテーション及び質疑応答を行った。質疑応答のやりとりは以下のとおり。

【委員】

提案書に共有できるミッション、ビジョン、アクションと記載があったが、クラスターの場合、参加者同士は緩いつながりなので、必ずしもアクションまで同じにならないケースもあるのでは。

【事業者】

クラスターごとに最終的に細かいアクションが変わることはあることは想定されるが、同じ目的が発生しうるので、そこを握り合うことが大事。頂いた情報をもとにイマジネーションを働かせて解釈したが、実際の事業では協議のうえで行っていきたい。

【委員】

今回いただいている提案は総論的な印象で、健都ならではの部分が見えにくいと思った。健都だからこそ力を入れていきたい、というところを教えてほしい。

【事業者】

まだ健都ならでは、というところがまだ見えにくい時期。この一年間で確認していきたい。最終的には健都のブランド確立に向けたロードマップが必要。

【委員】

プラットフォームの人材確保、財源確保策について具体的にイメージしているのもがあれば。

【事業者】

具体的にはイメージは持ち合わせていない。ニーズ把握・分析や試行的な取組みによる仕掛け及び仕組みの検証を踏まえ、関係者間の検証が必要。

【委員】

健都の特長を踏まえ、プラットフォームにおいて行政の果たす役割は。

【事業者】

吹田市のクレジットがあることで公のプロジェクトであることが明確になり、信頼、ブランドの一つとなる。具体的なスケジュールは協議したいが、節目節目で行政の号令をいただきたい。広報チャンネルも活用し、一般市民への見える化もお願いしたい。

（６）事業者のプレゼンテーション及び質疑応答を終え、各委員から提案につ

いて、優れている点や留意すべき点などについて、意見交換を行った。

【委員】

４社から応募があり、健都への関心の高さが分かった。業者だけでは市民参加が難しい部分があるので、行政が関わり、取組んでいく必要があるのでは。

【委員】

Ａ社は対企業が強く、逆に市民参画の部分が弱い。Ｂ社はすでに企業と話をしていて前向き。市が、企業と市民との間に入るのが重要かと思った。Ｃ社は大学のリビングラボを中心に考えているが、うまく動いているか不安。また、ワークショップでは意識が高い参加者ばかりにならないか懸念。Ｄ社は総論的だった。

【委員】

大学のリビングラボの提案はあったものの、吹田市、摂津市にはいくつか大学があるなかで学生の力を取入れる提案がなかったのは残念。

【委員】

Ａ社は事業者寄りだったが、対市民の部分で弱みを認識しており、外注するというお答えで、それでよいかと思った。Ｂ社の提案にあった「こども大学」において専門的な内容を共通言語化し、結果的に異業種との連携につながっていくという考えにはなるほどと思った。

【委員】

Ｂ社はこれからもアイデアがたくさん出てくる印象。市民ニーズを幅広く吸い上げる提案になっていたと思う。Ｃ社は大学のリビングラボを活用するということだったが、全体としてはオーソドックスな内容と感じた。

（７）各委員の採点・評価を踏まえ、その結果を事務局が集計し、事業者選定会議に報告することについて、異議なく了承された。

以上